

福井大学所蔵の貴重資料、
「小島家文書」を知っていますか？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 裕子, Hasegawa, Yasuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028963

福井大学所蔵の貴重資料、 「小島家文書」を知っていますか？

教育学部社会系教育講座

教授 長谷川裕子

HASEGAWA Yasuko

出身：千葉県

専門：日本中世史（戦国時代から江戸時代前期の村・民衆生活に関する研究）

本学文京キャンパスにある総合図書館の特殊資料室には、6000点を優に超える江戸時代の古文書群、「小島家文書」が所蔵されています。「小島家文書」は、いわゆる「^{じかた}地方文書」と呼ばれる文書群で、江戸時代の村において行政上の必要から作成された記録や、幕藩権力から発出された公的な通達などを含む数多くの古文書を今に伝えています。

「小島家文書」は、その名の通り小島家に伝わった古文書群です。小島家は、江戸時代には越前国坂井郡野中村（現坂井市三国町野中）に居住して庄屋や大庄屋を務めた家で、まさに村の政治や地域行政の中核的役割を担っていた家でした。庄屋とは、各村に設置された村役人のトップで、村から支払う年貢などの税の徴収・納入を主導し、納税に必要な土地や生業の場を管理するなどの役割を担った存在で、大庄屋は、そうした周辺村の庄屋を取りまとめつつ、村々と領主とを繋ぐ役割を担った存在です。代々、庄屋であり大庄屋であった小島氏の家に残された「小島家文書」には、領主権力の諸政策から当時の社会状況、および村に住む人びとの生活の有り様を紐解く手がかりが豊かに、そして江戸時代初期から明治時代に至る長期に亘って残されているのです。

幕藩権力の政策から一般庶民の生活に至るまで、まだまだ解明されていない難問が江戸時代研究には横たわっています。江戸時代の実像を探るための内容を秘めた「小島家文書」が、現ご当主の小島章宏氏によって本学の総合図書館に寄贈されたのは2012年のことでした。寄贈いただく以前より、小島家は江戸時代以来住んでいた野中村を離れ東京に在住されていましたが、代々伝わる古文書群については、地元にあった方が活用されるとご判断なさった先代の小島武郎氏によって1972年に本学附属図書館に寄託されたのです。その後、さらなる寄託を

受けながら古文書群の整理が進められ、一部未整理のものも残ってはいますが、整理された古文書は『新訂・増補 小島家文書目録』にまとめられるとともに、現在では福井大学附属図書館のホームページ上で「小島家文書」の目録と写真が公開されています（トップページにある「貴重資料」から「小島家文書」Webサイトにアクセスできます。<https://www.flib.u-fukui.ac.jp/elib/kojima/>）。

では、どのような内容の古文書が残っているのでしょうか。まず目を引くのが、大量に残された年貢などの税に関わる公的な古文書です。江戸時代の百姓は、農村であれ、山村であれ、漁村であれ、何らかの生業を営み、それによって生み出された生産物を年貢として領主に貢納していました。貢納は、「^{むらうけ}村請」といって村単位で行われますが、年貢収納時期（生業によって異なりますが、農村であれば米の収穫期）に毎年の税額が領主から「年貢割付状」として通達され、それを受けて村の中で各百姓に年貢を配分し、実際に各百姓が納めた年貢の量などを記した帳簿類が村の中で作成されます。このような貢納関係の古文書は、野中村に限らず、日本全国、各地の村々に残されていることは多いのですが、これらの古



1点ずつ中性紙の封筒に保存しています



文書はその村がどんな生業を行っていたのか、またどれくらいの土地を確保していたのか、そしてそれを利用する人びとが当時は何人ほどいたのかなど、村の基本的な情報やその村の特徴を把握するには欠かせない史料となっています。逆に言えば、貢納関係文書がなければ、村の研究は進められないといってもよいくらいです。江戸時代研究において、村の研究は飛躍的に進められてきていますが、地域による偏差や、生業の違いによる村の個性などについてはまだ今後の研究課題として残っています。その課題を解明するためにも、あらゆる地域の村研究を進め、比較検討していかなければなりません。そのための重要な手がかりが「小島家文書」の中には豊富に残されているのです。

そしてもう一つ、「小島家文書」の特徴となっているのは、小島氏が大庄屋を務めたことによって残された各種の行政文書です。大庄屋は、数ヶ村から数十ヶ村を束ね、領主代官などからの通達を各村に伝えたり、各村からあげられた要請や移動許可書などを領主に提出したりするなど、領主と地域とを取り結ぶセンター的な役割を果たしていました。そのため、大庄屋の家には、村明細帳や宗門人別帳など、村の基本情報や住民情報を記した帳面や古文書が、大庄屋の住んでいる村以外の村の分も含めて伝わっているのです。また、地域の村々が抱えていた紛争や生業を阻害する諸問題などについて人びとが領主に訴える際には、大庄屋自ら管轄している村々やその周辺の村々とも協働し、行動していましたので、当時の人びとが何に苦しんでいたのか、それをどう改善しようと模索していたのかという、人びとの生々しい生き方を追うことができる点においても貴重です。このような人びとの訴えは、江戸時代の村の実像とともに、まさに「時

代が動く」ときの社会状況や原動力を知るためには不可欠の史料だからです。そして、大庄屋についてもまだまだ解明されていないことが多く、現在においても各地の大庄屋の実像を追究し、他地域との比較研究を進めていく作業が継続されています。そのための素材としても貴重な資料といえるでしょう。

このように「小島家文書」には、江戸時代研究にとって興味深い古文書がバラエティ豊かに残されています。そして何より魅力的なのは、これだけの膨大な古文書群が、『福井県史』を除いてはほとんど研究に利用されていないということです。つまり、「小島家文書」を使って江戸時代の研究を進めれば、何か新しい知見が得られる可能性があるということです。現在では、比較的容易に古文書の写真が閲覧できる環境が整っていますので、皆さんも、「小島家文書」を使って江戸時代の謎解きに参加してみたいかがでしょうか。



長谷川先生には、隼田嘉彦先生（名誉教授）ご退官後、小島家文書に関する研究を引き継いでいただき、本誌にも毎号連載いただいておりますが、この度、ご転出されることとなりました。長きにわたるご尽力を感謝いたします。ありがとうございました。